シュヴァイツァーにおける世界観の問題について

岩井　謙太郎

はじめに

シュヴァイツァーが「生への畏敬」(Ehrfurcht vor dem Leben)の倫理を構想した背景には、現代において文化が危機に陥っているという問題状況が存する。彼は現代の文化的危機を克服し、平和をもたらすために「生への畏敬」の倫理を構築したのであるが、そのために、シュヴァイツァーは文化論を検討し、また古代から現代に至る倫理思想史上の主要な思想家の倫理思想を分析し、それを世界観（生命観）の諸類型、神秘主義の諸類型、自己完成の倫理と献身の倫理の諸類型等に整理し複合的に考察するのである。[1] 本稿ではシュヴァイツァー（Albert Schweitzer）における「生への畏敬」の倫理の構想の様々な問題群の中で、最初に、『文化の頽廃と再建』(Verfall und Wiederaufbau der Kultur)、『文化と倫理』(Kultur und Ethik)、遺稿『われら亜流者達――文化と文化国家』(Wir Epigonen. Kultur und Kulturstaat) における、シュヴァイツァーの文化論を検討することで、彼の文化論と人間性の概念の特性を明らかにする。[2] 次いで、『文化と倫理』『文化の頽廃と再建』において、シュヴァイツァーがいかなる世界観(Weltanschauung)を構築しているのかについて、彼独自の生命観（Lebensanschauung）から、つまり、思惟（意志と認識との対話）と倫理（真の思惟）の観点から検討し、併せて世界観の構築のための倫理思想史的背景を考察する。最後に、『文化と倫理』における、倫理思想史的な背景とシュヴァイツァーの生命観に基づく世界観の展開から「生への畏敬」の倫理の構築のプロセスを考察し、「生への畏敬」の倫理と世界観の関係を論じる。

一　シュヴァイツァーの文化論

シュヴァイツァーが文化を考察した背景には、第一次世界大戦前後にドイツにおいて生じた危機意識が存する。近代において文明の優位性を自負したヨーロッパが戦場になり、とりわけ第一次世界大戦において敗戦国となったドイツにおいては深刻な文化の危機として強く受け止められたのである。この時期以降ドイツにおいて様々な思想家が文化哲学（文化社会学）について著作を著したが、その中でも哲学の中心的主題に文化論を据え、それについて詳細に論じたのはシュヴァイツァーであったのである。[3]

シュヴァイツァーは「我々の文化の不幸は、文化が精神面よりもはるかに物質面に強大な発展を遂げたこと」[4]によって文化

（精神的文化と物質的文化）の均衡が破棄され、その帰結として現代の文化的な危機が生じたと文化の特性を論じている。換言すれば、文化の物質的側面だけが一方的に発展し、それに伴った文化の精神的側面が停滞していることにシュヴァイツァーは文化の危機を見るのである。[5] シュヴァイツァーは私たちが文化を構築する際には文化の倫理性を問わなければならないと考えているが、従来の思想家は文化を考察する際に、文化の現実性のみを問い、文化の倫理性（規範性）を検討してこなかったことに問題を見るのである。それではシュヴァイツァーは文化をいかなるものであると考えているのであろうか。シュヴァイツァーは、『文化の頽廃と再建』において、文化の重要な特性を「ごく一般的にいえば、文化とは個人と共同体（Kollektivität）との進歩、物質的精神的進歩である」[6] と規定する。ここでシュヴァイツァーが進歩についてどのように考えているかが問題となろう。シュヴァイツァーは進歩について、「進歩は何よりも、個人にとっても共同体にとっても、生存競争が弱まるということである」[7] と規定する。

シュヴァイツァーによれば、生存競争とは、人間が自然を支配することと、人間が人間を支配することに存するが、彼は人間の生存競争が弱まるために「自然についての理性支配と、人間の本性についての理性支配が最大限かつ最も合目的的なあり方で展開すること」[8] を進歩と考えるのである。ここで指摘しておくべきことは、このシュヴァイツァーの主張はダーウィンの弱肉強食的な生存競争の観念を念頭において論じられたものであるということである。というのも、シュヴァイツァーはダーウィンの生存競争の理論からは文化に基づいた倫理が成立しえないと考えているからである。[9] このようなシュヴァイツァーの主張は以下のような文化の規定において顕になるのである。

「文化はその本質上二面的である。文化は理性が自然を支配するとともに、理性が人間の心情（Gesinnungen）をも支配することによって実現されるのである」。[10]

つまり、シュヴァイツァーは文化を構築するためには、理性（人間）が自然を技術的に支配することにおける進歩（物質的進歩）と、理性（人間）が自らの心情を支配することにおける進歩（精神的進歩）という二つの進歩が必要であると考えているのである。それではシュヴァイツァーは物質的進歩と精神的進歩の関係をどのように考えているのであろうか。確かに、シュヴァイツァーも物質的進歩は我々の生存競争が弱まるために必要不可欠なものであると考えている。しかし、物質的進歩には利点とならんで文化を危機に陥らせる側面も存するのである（大量殺戮、階級闘争等）。そのために、シュヴァイツァーは、文化が展開するためには物質的な進歩よりも、人間の精神的な進歩（理性が自らの心情を支配すること）を重要視するのである。このような『文化の頽廃と再建』におけるシュヴァイツァーの文化論は、以下に述べる『文化と倫理』において展開されるのである。シュヴァイツァーは『文化と倫理』において以下の

ように文化の重要な特性について規定する。

「文化の本質的なものは、個々人の完成という理想、諸国民(Völker)かつ人類の社会的かつ政治的状態の改善という理想を個々人が思惟し、個々人がそのような理想によって心情(Gesinnung)を、生き生きと、かつ恒常的な仕方で規定することである。個々人が精神的力として、自らにおいて、かつ社会において働くときにのみ、諸々の事実によって作りだされる様々な問題を解決し、あらゆる点で価値豊かな全体の進歩(Totalfortschritt)が生ずる可能性が与えられるのである[11]」。

このような『文化と倫理』における文化の規定から、シュヴァイツァーは、文化を構成する三種の進歩について指摘する。①知識および能力の進歩、②人間の社会化の進歩、③個々人と人類の精神性の進歩。①と③は先に検討した物質的進歩と精神的進歩に対応している。ここにおける進歩については「存在する一切が力、すなわち生への意志」であることが認識されてはじめて自然力を支配する進歩が生じるとされる。つまり、①を前提にして②と③の進歩が生じるのである。さらに、②と③の進歩から、四種の理念が以下のように分節されるのである。Ⅰ、個々人の理想、Ⅱ、社会的・政治的社会化の理想(国家の理想)、Ⅲ、精神的・宗教的社会化の理想(教会の理想)、Ⅳ、人類の理想。ⅠとⅣは精神性の進歩の理念であり、ⅡとⅢは人間の社会化の進歩の理念であると言えよう。ここで指摘しなければならないことは、ⅡとⅢは、個々人の倫理的精神化と、人類へと至る個々人の社会化の二つの様式であるとシュヴァイツァーが考えていることである。

「国家と教会は、人類へと至る、個々人の社会化(Vergesellschaftung)の様式にすぎない。それゆえ、社会政治的な、また宗教的な社会化の理想は、それらが個々人の倫理的精神化と、人類へと至る個々人の社会化という観点で合目的的となるということによって規定されているのである[12]」。

シュヴァイツァーは、先述した、文化を構成する四つの理念の連関について詳細に検討していないが同様の議論を、遺稿『われら亜流者達――文化と文化国家』において以下のように論じているのである[13]。

「あらゆる可能的な理性理念は個人、人類、国家的共同体、宗教共同体の理念によって規定されている。……四つの理想の内部で、個人と人類の理念は、国家共同体と宗教共同体の理念と比べてより普遍的なものとして示される。国家的共同体と宗教共同体は、人類へと至る個々人の社会化の二つの別の諸様式である[14]」。

二　シュヴァイツァーの人間性概念

次に、文化を構成する四つの理念の連関を明確化するために、遺稿『われら亜流者達』におけるシュヴァイツァーの国家論(国

家と個人の関係の問題）について考察してみよう。

シュヴァイツァーは、啓蒙主義時代のルソーを代表とする社会契約論的な人為的な国家観を批判し、自らの国家論を展開する。[15]

「国家に対する私たちの立場は以下のことによって規定されている。つまり、私たちは、それ自体存在する国家としての国家において生まれたことによって規定されている。この事実のために、私たちは国家に自然的な仕方（in natürlicher Weise）で所属しているのである」。[16]

シュヴァイツァーは、一方においては、国家が個々人を規定する側面（個人の受動性）を指摘するが、他方においては、個々人が国家を規定する側面（個人の能動性）をも論じているのである。

「個々人は、共同体における個々人の存在を、何か伝統的に与えられたものと法的に規制されたものとして単に受容するだけでなく、それらについて反省するのである」。[17]

シュヴァイツァーは、個々人の社会契約から国家を導く立場、個々人を国家に従属させる立場を共に批判する。シュヴァイツァーにとって「国家は個々人と共に展開しなければならない」のである。それではシュヴァイツァーは国家と個々人の関係をどのように考えているのであろうか。シュヴァイツァーは以下のように述べる。

「個々人が自然人（Naturmenschen）から理性人（Vernunftmenschen）になる程度において、同時に自然国家（Naturstaat）が理性国家（Vernunftstaat）の特性を受容する必然性が生じるのである。つまり、個々人が倫理的諸個人（sittlicher Persönlichkeiten）の高みに到達する程度において、同時に、国家は倫理的国家になるのである」。[18]

換言するならば、シュヴァイツァーは「利己的かつ熱狂的」な性格を保持するナショナリズムにおいて顕になるような非人間化（民族主義等）を克服するために、個々人が倫理化することによって文化国家（国家の道徳化）を構築しなければならないと考えているのである。そして、この文化国家を通じて人類へ至る個々人の社会化が生じるのである。ここで指摘しておくべきことは、シュヴァイツァーは自然という術語を、人間に対しては倫理的な理想に導かれることのない現実感覚（Wirklichkeitssinn）の意味で、国家に対しては自然な同質的な有機体（natürlicher und homogener Organismus）としての民族国家の意味で用いているということである。[19]

これまで検討してきたことをまとめるならば、シュヴァイツァーは、『われら亜流者達』において、個々人は国家（共同体的側面）に受動的に依存している側面を検討しつつも、単に個々人が国家に依存するに留まらず、個々人は国家に能動的（積極的）に関与することによって、つまり個々人が倫理的になることで、文化国家が構築（国家の倫理化）され、それを通じて、人類へと至る個々人の社会化が生じうることを考察している。

ここでは論じることができないが、なお個々人と教会（宗教共同体）の関係についてもシュヴァイツァーは同様の議論をしているのである。以上より、個々人が人類へと社会化するためには、個々人の倫理的精神化を通じて、国家（政治的共同体）と教会（宗教的共同体）が倫理的になることが必要であるということをシュヴァイツァーが検討していたと解釈しうると言えよう。ここに文化を構成する四つの理念の動的連関を見出しうるのである。このように「四つの理念が、相互に効力を発揮することによって文化への方向」[20]が与えられ、四つの理念が人間性の思想において統合されうるのである。

「人間性（Humanität）はその最も根本的で普遍的な形式における文化である。……文化についてのあらゆる記述は必然的に人間性に帰還するのである」[21]。

遺稿『われら亜流者達――文化と文化国家』においては人間性の思想は重要な概念であり、この人間性の思想は、後に検討する「生への畏敬」の倫理として結実するのであるが、『文化と倫理』においてシュヴァイツァーは真の人間性について以下のように述べている。

「私たちが自らに与えられている力を相互に放棄することだけが有効でありうる。このことは精神性の行為（eine Tat der Geistigkeit）である」[22]。

シュヴァイツァーは、現代において人間が過度に自然力を支配すること（物質的進歩）に伴って、人間の人間に対する支配（闘争）が強化された事態（民族主義、剝き出しの資本主義社会、それへの反動による階級闘争、戦争による大量殺戮等）を克服するために、人間が相互に自らの欲望を放棄（部分的に）しなければならないことを、人間性の思想において洞察しているのである。

しかし本節におけるシュヴァイツァーの人間性の思想の主張は、人間性や人間社会を超えた射程を有しているのである。すなわち、シュヴァイツァーは遺稿『われら亜流者達』において以下のように述べている。「自己以外の存在への本性的で自己中心的な関わりと並んで、個人が非自己中心的な関係を打ちたてるところに、活動的な精神的自由としての道徳性がある」[23]。

これについて、エリッヒ・グレーサー（Erich Grässer）とマイク・マルティン（Mike W. Martin）は、上述のシュヴァイツァーの人間性の思想が、人間性の射程を超えた現代における環境倫理（エコロジー）の問題を考える視座として有効であることを示唆している[24]。

三　シュヴァイツァーの世界観と生命観

現代の文化的な危機は、精神的進歩（個人と共同体が倫理的になること）を無視した一面的な物質的進歩の追求によって生じたのであるが、シュヴァイツァーは文化が危機的な状況に陥ったのは、当該の世界観が力を喪失したことに由来すると考

えるのである。

「真の文化の理念は無力となった。その理由は、真の文化が根ざしているところの理想主義的世界観がだんだんと消失したからである。諸民族、人類の中に生じるすべての出来事は世界観の中に与えられた精神的な原因に由来する」[26]。

シュヴァイツァーの文化論はいわば文化の形式的側面であり、文化の内実的側面は世界観として展開されうるのである。したがって次に世界観について考察しなければならない。ここでシュヴァイツァーの世界観についての規定を見ておこう。

「世界観(Weltanschauung)とは何か。社会(Gesellschaft)と個人が、世界の本質と目的について、また世界における人類と個人の地位と使命について展開する思想の総体である。私の生きている社会および私自身は、世界において何を意味するのか？　私たちは世界において何を期待するのか？　私たちは世界において何を欲するのか？　私たちは世界において何を期待するのか。こうした現存在の根本問題に対して、多くの個人が到達する答えが、彼らと彼らの時代が生きる精神について決定するのである」[26]。

このように、私たちと世界との関係性という根本的な問いについて、多くの諸個人が答えを提示することによって世界観が形成されるのであるが、シュヴァイツァー自身は、世界観が文化的な世界観（倫理的な世界観）になりうるためには、私たちが思惟することによって世界観を形成しなければならないと考える。その点については後に検討するが、ここで指摘しなければならないことは、シュヴァイツーは思惟概念を、単なる論理的思惟だけではなく意志と認識の対決、倫理的理想の洞察の意味で使用しているということである。

「思惟から生まれ、思惟に依拠するものだけが全人類にとっての精神的な力となりうる。多くの人々の思惟によって再び思惟され、その際真理とみなされるものだけが自然に伝えることができる持続的な説得力を持つ。持続的に思惟する世界観への欲求に訴えるところでのみ人間のあらゆる精神的能力が呼びさまされるのである」[27]。

つまり、文化の内実的側面としての世界観の問題は、今日の私たちの文化の危機的状況を克服するための重要な論点とシュヴァイツァーは考えているのである。換言するならば、シュヴァイツァーは、文化は人間が思惟することによって形成される世界観に基礎づけられることによって、文化的な世界観として結実し、それによって文化の危機が克服され、文化の再生の展望が開かれうることを検討しているのである。

それでは文化の危機を克服するためには世界観はどこに根拠づけられるのであろうか。この点について注目すべきことは世界観と生命観との連関をシュヴァイツァーが考えているということである。シュヴァイツァーにおける生命観と世界観についてポール・バーサム（Paul Barsam）とヘンリー・クラーク(HenryClark) は以下のように論じている。

「生命観（Lebensanschauung）という言葉は、個々人の生が個々人にとって意味するものについての個々人の主体的な視点（perspective）を含む。世界観（Weltanschauung）は個々人が自然と宇宙の目的について考える諸思想の総体である。世界観は一般的に生命観を包含する[28]」。

「宇宙の意味と構造についてのある人の解釈は、ある人の個人的存在（personal existence）の解釈を含む生命観について明確にするであろう[29]」。

バーサムとクラークが指摘しているように世界観と生命観は密接に連関していると言えるのであるが、実際、シュヴァイツァーは『文化と倫理』において、独自の生命観（Lebensanschauung）から世界観を考えているのである。すなわち、シュヴァイツァーは世界観（生命観）について思惟と倫理の視点から考察しているのである。そこで、シュヴァイツァーの思惟概念を検討してみよう。シュヴァイツァーは「思惟は私において生ずる意志と認識との対決である[30]」と述べているが、人間が思惟することによって形成される文化的な世界観もまた、この意志と認識が相互に対決することによって生ずるのである。

「思惟が目覚めると、それまで自明であったことを問題にするような問いが生ずるのである。どのような意味を君の生に与えるのか？　この世界の中で君は何を欲するのか？　これによって認識と意志との対決が始まるのである[31]」。

このような問いが生じる以前においては、世界全体に客観的な合目的性が存するという認識を素朴に抱くことによって、私たちは自らの生への意志を素朴に肯定しているが、私たちがその生への意志を反省するに至り、世界全体に客観的な合目的性が存することを確信している素朴な認識と、私たちの意志のあり方が問いに付されるのである。つまり、私たちの素朴な生への意志と世界全体の客観的な合目的性の確信が否定されると言えよう。このような思惟（意志と認識の対決）を媒介して、シュヴァイツァーは真に思惟すること（倫理的洞察）へと向かうのである。したがって「倫理的になることは、真に思惟的になることを意味するのである[32]」。

このような思惟（意志と認識の対話）と真の思惟（倫理）の視座から、シュヴァイツァーは生命観を構築していくのであるが、シュヴァイツァーは意志と認識との対決のあり方（生命観）に三つの類型が存し、それに対応して三つの世界観が生じうることを以下のように検討しているのである。①意志が自らの願望を認識に投影する立場（素朴な倫理性）、②意志が自らの現実を注視することによって生じる「生への意志」の自己分裂性の認識（倫理性の喪失）、③「生への意志」の自己分裂を克服し連帯を求める理念的な「生への意志」の認識である（高次の倫理性）。そして、この各々の生命観に対応して、世界観にも以下のように三つの立場が存することをシュヴァイツァーは考察しているのである。つまり、①楽観論的世界観（世界と生の肯定の原理）、②悲観論的世界観（世界と生の否定の原理）、③高次の

楽観論的世界観（世界と生の否定の原理を媒介した倫理的な洞察を含む世界と生の肯定の原理）が、生命観に対応しているのである。シュヴァイツァー自身は③の立場を提唱するのであるが、それについては後に検討する。

以上から、シュヴァイツァーは人間が文化的な世界観を構築するためには、楽観論的世界観（世界と生の肯定の原理）と倫理的原理という二つの視座の共同作用が必要であることが明らかになるのである。

ここでシュヴァイツァーが文化的な世界観を構築するために楽観論的世界観と倫理的原理が必要であると考えるに至った彼の倫理思想史の分析を概観することは有益であろう。シュヴァイツァーによれば、上述の二つの原理が結合したのはルネサンス時代にまで遡ることができるのである。楽観論的世界観は、ルネサンス期のコペルニクス、ケプラー、ガリレオ等の出現によって「自然においてはすべてが合目的な法則性に従って生ずるということがますます明らかになったので、社会と人類の状態も合目的な方法で組織化されうるという信頼[33]」から生じ、それが倫理的原理と密接に結びついたとされる。続いて、この楽観論的倫理的世界観は十八世紀の啓蒙主義的合理主義の時代に頂点に至ったのである。しかし、この啓蒙主義的合理主義的時代の、倫理的原理と結びついた楽観論的世界観は次の十九世紀においては脆くも打ち砕かれ、楽観論的倫理的な世界観に対する根本的な確信は崩壊したのである。というのも、この時代の世界と生の肯定と倫理的原理を有する世界観（楽観論的倫理的世界観）は、楽観論的・倫理的な意味において世界に目的（合目的性）が存することを客観的に認識したという信念にすぎず、この信念に対する確信が喪失することによって、楽観主義的倫理的世界観が衰退し、悲観論的世界観の登場を迎えるに至ったからである。このように、シュヴァイツァーは自身の楽観主義的世界観と倫理的原理の視座（悲観論的世界観の検討も含まれる）を倫理思想史の考察から得ているのである。

四　シュヴァイツァーの「生への畏敬」の倫理における世界観（生命観）

先に啓蒙主義時代の楽観論的世界観が十九世紀に危機に瀕した理由をシュヴァイツァーの倫理思想史において検討してきたが、それが危機的状況に陥った理由を、生命観（世界観）から検討し、そこからシュヴァイツァーがどのようなプロセスで「生への畏敬」の倫理を構築するに至ったかについて考察する。

シュヴァイツァーは、啓蒙主義時代における楽観論的世界観が機能不全に陥った理由を、意志が自らの願望（世界全体のプロセスが楽観論的・倫理的であると考えるような願望）を認識に投影したことに存すると考えている。しかし、このような願望の投影は、意志が自らの現実を注視して、世界全体のプロセスを悲観論的に見るような見方に容易に反転しうるのである。

それでは、なぜ意志が自らの現実を注視するときに世界全体のプロセスを悲観論的に見るような見方が生じるのであろうか。それは「世界は『生への意志』の自己分裂の劇の恐ろしい光景」[34]を呈しているからである。つまり、ある生命体は他の生命体を犠牲にして生存しているというありのままの現実（弱肉強食的な状態）を意志が見出すからである。先に思惟と認識との対立として言及したように、意志は、世界の全体のプロセスに客観的な目的（合目的性）を設定するような楽観論的倫理的な解釈をしえないことを自覚するのである。そこにシュヴァイツァーは、楽観論的世界観が危機に瀕する要因を見ているのである。このような点をふまえて、シュヴァイツァーは意志が自らの願望を認識に投影する楽観論的な見方と、意志が自らの現実を注視したときに生じる悲観論的な見方を克服しうる道（生への畏敬の倫理）を思索するのである。

「生命観と世界観の相互関係を思惟が明白にするときに思惟は、認識の断念（Die Resignation des Erkennens）と世界人生肯定と倫理に固執すること（Das Festhalten an Welt-und Lebensbejahung und Ethik）を相互に結びつけることができる。それが無批判な思惟に現れる仕方では生命観は世界観には依拠していない。生命観は認識によって基礎づけられることを願うにもかかわらず、生命観は認識から生ずるのではない。生命観は自己自身の上に提示することができる。なぜなら生命観は我々の生への意志に根ざしているからである」[35]。

このように、シュヴァイツァーは、いわば主観―客観図式的に世界全体のプロセスを楽観論的かつ倫理的に解釈し、そこに人間の生の意味を投影すること（素朴な世界認識）を断念（諦念）[36]することによって、世界観（生命観）は我々の生への意志の体験に根ざしていることを明らかにするのである。

「世界についての私の知は外部からの知であり、常に不完全なものである。しかし、私の生への意志からの知は直接的であり、生の神秘に満ちた諸活動（Die geheimnisvollen Regungen des Lebens）にまで遡るのである」[37]。

「すべての現象の背後にも、中にも生への意志が存在する。ますます深く、ますます包括的となる認識とは、存在する一切が、まさに、生への意志であるという神秘（Rätselhafte）の中へと私たちを導きいれることである」[38]。

この自己を何らかの仕方で超越したものに対する、生への畏敬の体験が、自己の生への畏敬の体験と結びつくことによって、自己の生への意志が肯定されるのである。ここにシュヴァイツァーの体験を媒介にした神秘主義的な側面が現れていると言えよう。ここでは詳細に説明することはできないが、シュヴァイツァーが「すべてにおいて存在する神秘的な生への意志を前にしての畏敬（Ehrfurcht vor geheimnisvollen Willen zum Leben）で私を満たす（mich erfüllt）」[39]と述べているように、生への畏敬の体験は、いわば自己が受動的であるような神秘主義

的側面を有しているのである。[40] そして、シュヴァイツァーは、以下のように我々の生の意志に存する理念（倫理）を深く洞察するのである。

「思惟が倫理の成立において演ずる役割の問題に直面する。思惟は本能の内実を把握し、新しい首尾一貫した方法で顕在化するよう努めるのである。……生への意志そのものにおいて存する生の肯定との類比において、生への意志を促進し、かつ、その周囲に存する多種多様な形態の生の肯定を承認し、共体験することを促進するのである」。[41]

つまり、シュヴァイツァーは、自己を超越したものと自己に対する受動的な生への畏敬の体験を媒介にして、自己の「生への意志」が、倫理的なものをいわば能動的に洞察（思惟）することで、他の被造物に対する「生への意志」の肯定（共感・共体験）が生じ、そこを起点に、私たちが他の被造物へと献身助力するような倫理が実現されうると考えているのである。換言するならば、一方において、シュヴァイツァーは生への意志の本質を「十分に生き抜こうとすることである。生への意志は自己を最大限に可能な完全さで実現したいという衝動を担う」[42]ことと規定することによって、生命体の本能的な生への意志の契機を保持しつつ、他方において、人間の生への意志における「完成への衝動が、我々自身かつ、我々によって影響を受けうる一切の存在を最高の物質的精神的価値へともたらそうとする」[43]理念によって、意志を規定すること（倫理的側面）を洞察しているのである。そこにおいてシュヴァイツァーは「生を維持し促進することは善であり、生を破壊し毀損することは悪である」[44]という道徳の根本原理を定式化するのである。

終わりに

これまでシュヴァイツァーの文化論、世界観（生命観）の諸問題を検討することによって、シュヴァイツァーの「生への畏敬」の倫理の構築のプロセスを論じてきた。現代においてシュヴァイツァーを論じる意義は、科学技術の未曾有の発達に伴う文化の危機、特に近年における宇宙的規模の環境の危機を前にして、それを克服しうるような生命観を提示したことに存すると言えよう。ただ、これまで考察してきた、シュヴァイツァーの文化論（近代啓蒙主義的理性主義的側面）と生への畏敬の思想（自然主義的側面）との関係について、本稿では考察することができなかったので今後の検討課題としたい。また、生命観と世界観の関係について、シュヴァイツァーは生命観を起点として、倫理の根本原理を洞察することによって形成される世界観（生命観）と、生命観を排除した世界認識としての世界観（生命観）を区別していることを検討してきたが、両者の関係が問題になると言えよう（世界観の二重性と生命観の二重性の関係）。その点について一九三三年から一九三七年にかけて執筆された、遺稿の文化哲学第三部『生への畏敬の世界観』において、

シュヴァイツァーは世界観と生命観との関係について指摘している。

「いずれの世界観においても生命観は存する。我々は世界観を生命観と結びついた世界についての見方（世界観）と解釈する」[45]。

シュヴァイツァーは、生命観を排除するような世界認識としての世界観にも、生命観から生ずる世界観が組み込まれうることを示唆しているのである。また、シュヴァイツァーが「世界観はまさに世界認識によって生命観を確認し、生命観によって世界認識を把握するところの生命観と世界認識の統一である」[46]と述べているように、シュヴァイツァーは、世界認識の世界観と、生命観から生ずる世界観は区別されるものの両者は世界観において「連関」していると考えていたのである。ここでの問題は、世界認識としての世界観と、生への意志を起点とした生命観が、どのように「連関」しているかということである[47]。この点についても本稿では問題の所在を示唆するにとどめ今後の検討課題としたい。

註

(1) シュヴァイツァーにおける思想の全体的背景については、金子昭『シュヴァイツァー　その倫理的神秘主義の構造と展開』白馬社、一九九五年参照。

(2) 遺稿『われら亜流者達』は一九一四年から一九一八年にかけてシュヴァイツァーが執筆した初期原稿である。この遺稿においても生への畏敬の萌芽的な叙述は存するが、シュヴァイツァーは、生への畏敬の思想を一九二三年に出版された『文化の頽廃と再建』、『文化と倫理』において本格的に論じたと思われる。

(3) ジョージ・シーパー、会津伸訳『シュヴァイツェル　人間と精神』みすず書房、一九五九年参照。
金子昭「文化国家論にいたるシュヴァイツァーの文化哲学の射程」『天理大学おやさと研究所年報』第十五号、二〇〇九年参照。

(4) Albert Schweitzer, *Kultur und Ethik*, München 1923. (C.H. Beck, München, 10. Aufgabe 1953), S. 2.

(5) 芦名定道「シュワイツァーと現代神学の生命観」『シュワイツァー研究』第二十二号、一九九四年参照。
笠井恵二「シュワイツァーの平和思想――人類の未来をめざして」『シュワイツァー研究』第二十一号、一九九三年参照。

(6) Albert Schweitzer, *Verfall und Wiederaufbau der Kultur*, München 1923. (C.H. Beck, München, 10. Aufgabe 1955), S. 21.

(7) ibid, S. 21.

(8) ibid, S. 21.

(9) Albert Schweitzer, *Kultur und Ethik*, S. 141–143.

(10) Albert Schweitzer, *Verfall und Wiederaufbau der Kultur,* S. 21.
(11) Albert Schweitzer, *Kultur und Ethik*, S. 2.
(12) ibid, S. 259.
(13) 金子昭「文化国家論にいたるシュヴァイツァーの文化哲学の射程」参照。
(14) Albert Schweitzer, *Wir Epigonen. Kultur und Kulturstaat* (hrsg. v. Ulrich Körtner u. Johan Zürcher, München C.H. Beck 2005), S. 168.
(15) シュヴァイツァーは国家が受動的に個々人を規定するような国家の側面について以下のように述べている。「私たちの国家に対する根本感情は畏敬である。国家は、そこにおいて個々人が生ずる共通の生命である」(ibid, S. 219)。
(16) ibid, S. 219.
(17) ibid, S. 218.
(18) ibid, S. 219.
(19) Albert Schweitzer, *Verfall und Wiederaufbau der Kultur*, S. 29.
(20) ibid, S. 169.
(21) ibid, S. 170.
(22) ibid, S. 259.
(23) Albert Schweitzer, *Wir Epigonen. Kultur und Kulturstaat,* S. 191.
(24) Marvin Meyer & Kurt Bergel (ed.): *The Ethics of Albert Schweitzer for the Twenty-first Century. Reverence for Life*, Syracuse University Press, 2002,
Erich Grässer, The Significance of Reverence for Life Today, p. 159-165.
Mike W. Martin, Rethinking Reverence for Life, p. 166-170.
(25) Albert Schweitzer, *Aus Meinem Leben und Denken*, Leipzig, 1931 (ungekürzte Ausgabe, 1959, Richard Meiner in Hamburg), S. 125.
(26) ibid, S. 49.
(27) ibid, S. 52-53.
(28) Marvin Meyer & Kurt Bergel (ed.), ibid., Ara Paul Barsam, Albert Schweitzer. Judaism and Reverence for Life, p. 219.
(29) H. Clark, *The Philosophy of Albert Schweitzer,* Printed in Great Britain by John Dickens & Co. Ltd., 1964, p. 28.
(30) Albert Schweitzer, *Kultur und Ethik*. S. 227.
(31) ibid, S. 197.
(32) ibid, S. 227.
(33) Aibert Schweitzer, *Kultur und Ethik*. S. 58.
(34) ibid, S. 232.
(35) Albert Schweitzer, *Kultur und Ethik* S. VII.

較思想研究』、第二十九号、二〇〇三年参照。金子昭「シュヴァイツァー研究の最前線」『シュヴァイツァー研究』第二十号、一九九二年参照。

(36) 諦念の意味については、野村実「私のシュワイツァー遍歴時代」(『生命への畏敬』シュワイツァー日本友の会、一九九八年所収)を参照。

(37) ibid, S. 201.

(38) ibid, S. 227-228.

(39) ibid, S. 228.

(40) シュヴァイツァーは『文化と倫理』において自らの立場を倫理的神秘主義と考えている。ここではその点について検討することができないが、シュヴァイツァーの生への畏敬の倫理(倫理的神秘主義)はシュヴァイツァーの『使徒パウロの神秘主義』(*Die Mystik des Apostel Paulus*)におけるパウロの神秘主義思想と密接に連関して構築された倫理であると思われる。

(41) ibid, S. 210.

(42) ibid, S. 201.

(43) ibid, S. 201.

(44) ibid, S. 229.

(45) Albert Schweitzer, *Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben, Kulturphilosophie III, Erster und zweiter Teil*, C.H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München, 1999, S. 203.

(46) ibid, S. 321.

(47) 金子昭「シュヴァイツァーにおける世界哲学の構想」『比